

チーム第一 挫折に学ぶ



ふるさと
エール



宇津木妙子さん

ソフトボール元日本代表監督

さまざまな分野で活躍している本県出身者が登場してもらひ、古里から何を学び、どのような影響を受けたのかなど、古里にまつわる思いやエピソードを語ってもらう新企画「ふるさとエール」。トップバッターは川島町生まれで、ソフトボール元日本代表監督として五輪を指揮した宇津木妙子さん(62)です。

(聞き手 竹田淳一郎)

ソフトボール人生を振り返る宇津木さん
(坂戸市の東京国際大) =安斎晃撮影

ラブルで、一週間練習を休みました。顧問の先生から「チームはおまえだけじゃない」と言われました。自分の行動で多くの人たちに迷惑をかけたことを反省しました。応援してくれる母を悲しませたくない思いで帰郷しました。あの時逃げ出していたら今の自分はなかつたと思います」

毎朝4時起き

高校卒業後は、13年間にわたって岐阜県の「ユニチカ力垂井」で選手として活躍しました。「ユニチカには、優秀だった同級生の『付録』と言われて入りました。すぐにはレギュラーになれず、毎朝4時に起きて4キロ走ってから練習や仕事に行きました。当時は先輩の服を洗濯し、他の選手と話をしてはいけないという理不尽な規則ばかりでした。21歳で私がキャプテンになり、自分のことは自分でやるようになり、応援してくれる選手と話すことができるようになりました」

国内外で普及活動

経歴

「うつき・たえ」1953年生まれ。川越市の星野女子高(現・星野高)から実業団のユニチカリバ井(岐阜県)に入社、主に三塁手として活躍した。85年に現役引退後は日立高崎(群馬県)の監督となり、金百本総合選手権で5度、日本リーグで3度の優勝に導いた。群馬県高崎市在住。

——どんな子どもでしたか。
「5人きょうだいの末っ子でしたが、正義感が強く曲がったことが嫌いな子どもでした。男の子が女の子を弱い者じめしていると、かかつて弱い子と一緒に行動してありました。クラスでも弱い子と一緒に行動していました。

——いたのを覚えています。
「古里の川島町はどのような所ですか。
「周りには10軒ぐらいの家があり、何でも分け合ふ風習がありました。葬式もんじゅうなんかをもらうと、母親が私たち子どもに分け与える前までいました。母に褒められたくて

——近所にお裾分けをしていたのを覚えています。子どもながらに、自分さえ良ければいいという考え方でいけないといふ気持ちを教わりました」

——中学でソフトボールを選んだ理由は。

「隣に住んでいた先輩が中学生で投手をやっていて、一緒に通学できると思い、ソフトボール部に入りました。顧問の先生から『ソフトボールを通じて自分の一番の長所を見つけろ』と言われました。私の長所は元気だと思っていました。中学や高校では、私に対して厳しく、期待もしてくられた母に、いつか娘めてもらいたいと思って、部活動に取り組みました。母は私の性格をよく知っていました」

——挫折はありましたか。

「入社後の3年間は、午前に会社の寮生の郵便物を配達し、午後は寮中のトイレ掃除を毎日やり続けました。『リフトボールをしに入ったのになぜ』といふ不満があった私に、上司が『働くということ、お金を稼ぐということは、いうことなんだ。誰かがしなくてはならない仕事がある』と言わされたことを今でも覚えています」

——寮母もしたそうですね。

「ユニチカにいた最後の3年間に寮母を務めました。寮生が工場で指をけがした時には、3晩寝ないでマサージをしました。若い寮生たちが寮生活や仕事を楽しく続けるにはどうすればいいかと考えるようになりました。寮母をやつて人を生かす大切さを学びました」

中高生時代、部活通じ自分見つめる

「高校一年の時に部内のト

川島町つないだ聖火

女子ソフトボール界をリードしている大川島町出身の宇津木妙子さん(62)にとって、監督としてメダルを獲得したシドニーとアテネ、夢を託した教子たちが頂点を極めた北京という三つの五輪は、50年間のソフトボール人生を語る上で欠かせない出来事です。新企画「ふるさとエール」の2回目は、五輪にかけた熱い思いを語ってもらいました。

小学5年生だった1964年の東京五輪の時、古里の川島町で聖火リレーをしたそうですね。

「なぜ、私が聖火ランナーだったのか、今も不思議です。ただ、トーチを受け取った」といふと、五輪との強い運命を感じています」

「」の時の代表チームは最強でした。選手全員が金メダルを取るという同じ目標に向かっていました。五輪までに

トレーニングになったアンバ
イザーとサングラス姿で学生を
指導する宇津木さん（坂戸市
の東京国際大で）＝安斎晃撮影



活人本一山林子四毛金



「少々の失敗を繰り返すことを続ける決意をしました。メダルしかないという試合でしたら、勝てない試合をしました。ペアラン選手、どこか人任せにならなかった反省しています。が終わった後、上野由里(北京五輪のエース)と監督はできない。あなたが、私と日本ソフトボールの夢である金を取つてきました。」と伝えました

「四の最後の打者を三塁
わち取った瞬間、「上
がとう」という気持ち
で私が監督ではない
という悔しい気持ちが
み上げました。金メ
リ松の夢であり、ソフト
アンの夢。かなえて
代表チームに感謝して
気持た
覚とす
時とのよ
が期待す
整つて
が選手す
」

「2020で
ノットボールを東京五輪
競技に復活させる」と
2年後に金メダルを取
何が必要なのか考え
います。東京五輪の後、
20年の五輪にもソフト
が続くよう、国内外で
活動を続けることが、私
と思っています」

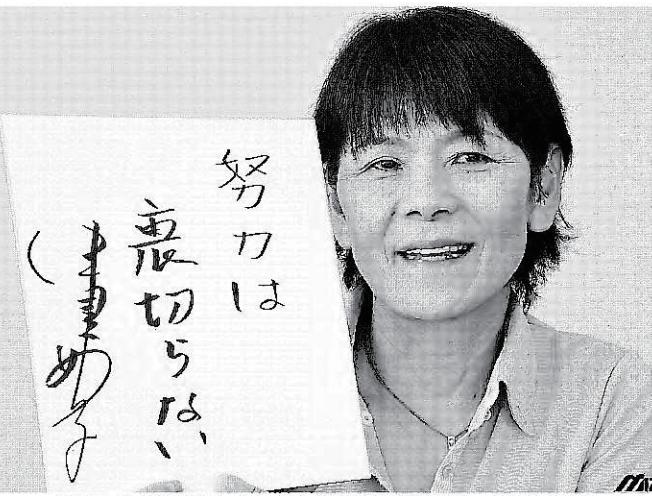
ボーラーの最大の

ノンちゃんもチャンスはあります
みんなが手に汗を握り、
でもみんなで助け合
トボールは、情や人
心を教えてくれま
るの東京五輪では、女
ボーラーの金メダルに

さんは、2011年6月にNPO法人「ドリーム」を設立。五輪をともに

日本代表の選手や全国の賛同者らとソフトボールの普及活動を続けている。3月27日のプロ野球・巨人—DeNAの開幕戦では始球式を行った。ユニホームの背番号は、野球とソフトボールが20年の東京五輪で復活するよう願いを込め、「2020」だった。

表は08年の北
で悲願の金メダ
得しました。解
涙を流していた。
さんの姿が印象
日本中の涙を流しましたから
年の東京五輪では、ソフトサ
ールで感激の瞬間が来ると言
じています」
もし東京五輪で指揮を
執るなら、どのような
だ。



色紙を手に語る宇津木さん（坂戸市の東京国際大）＝安斎晃撮影

夢はかなう 信じること

私は「努力」という言葉が好きです。最近は努力することを格好悪く言う風潮もありますが、私自身、ソフトボール生活を50年もやってこられた今の自分がるのは、努力して一歩ずつ階段を上ってきたからだと思っています。ソフトボールでたとえるのなら「練習は裏切らない」という言葉にもつながります。練習でもとなくではなく、一つ一つを意識してやることが大事です。今も「やれるんだ」「やらなくてはいけないんだ」と常にむち打って努力している自分がいます。人生も一生懸命に生きることで「自分の夢はかなえられる」と信じることが大切だと思います。

「企業人でもあった父から『監督は監督代行で、用務員である』と言われました。毎朝4時起きて川島町から通い、選手全員の体調を把握

■ 家族の反応は。
「企業人でもあった父から『一生懸命プレーするチームを作つてほしい』という工場長の言葉に打たれ、監督になる決意をしました」

監督といふ仕事は、企業や教育現場のリーダーにも通じる部分がありますね。

「選手に分け隔てなく接する」ことです。試合はレギュラートリオ控えがあり、平等とはいきませんが、常に選手やスタッフ全員と会話をすることを大切にしました。皆、女性なので言わないう心がけました」

「選手全員と会話 大切に

2度の五輪代表チームや国内実業団チームの監督として、実績を残した川島町出身の宇津木妙子さん(60)の指導方法や哲学は、教育現場や企業でも高い評価を得ています。「ふるさとエール」の3回目は、

「31歳の時、13年間所属したユニチカ垂井(岐阜県)で指導者になつたきっかけは何ですか。」

現役を引退して川島町の実家に戻り、当時日本女子リーグ3部だった日立高崎(群馬県高崎市、後のルネサス高崎)

するため、朝練や朝食を共にしました。球技も率先し、自分をさらけ出して信頼関係を築いたと思いました」

長所伸ばし 短所生かす

宇津木さんが考えるリーダーの在り方に迫ります。

「31歳の時、13年間所属したユニチカ垂井(岐阜県)で

するところがあります。教えたことをすぐにできる子とできない子もいます。できない子にどうやって教えるか。学校で講演する時は、子供たちに『叱られるのは期待されているからですよ』と話します。教える側は、いろいろ言葉をければ理解してくれるかもしれません、常に選手やスタッフ全員と会話をすることを大切にしました。皆、女性なので言わないう心がけました」

「選手、部門、子供と共に生きるには、長所を伸ばし、短所を生かすのが大切ということがあります。スポーツの世界では、まじめな子よりも、ちゃんとほんんな性格の子の方が活躍することができます。」

「55歳で監督を辞めた時、やはり寂しかったですよ。死ぬ時はノックバットを持ったまま倒れたい」と思うほど、選手もソフトボールも好きですから。またどこかで監督をやりたい気持ちはあります。ただ、辞めた時思ったのは、今までと違うことをやらなければどうということです。それが、ソフトボール普及活動につながっていると思います」

普及させる立場からみて、五輪の監督に求められる」とは。